

教育哲学会

第60回大会プログラム



2017年10月14日(土)・15日(日)

大阪大学 吹田キャンパス
人間科学研究科棟

大会日程

10月13日(金) 大会前日

16:30 ~ 18:30 全国理事会 [本館2階 会議室A]

10月14日(土) 第1日目		10月15日(日) 第2日目	
10:00	受付開始 [本館1階 インターナショナルカフェ]	09:00	受付開始 [本館1階 インターナショナルカフェ]
10:30 ~ 13:00	一般研究発表 [本館3階31・32・33講義室、 本館4階41講義室]	09:30 ~ 12:00	一般研究発表 [本館3階31・32・33講義室]
13:00 ~ 14:30	昼食・休憩 全国編集委員会 (13:15 ~ 14:15) [本館2階 会議室A] 研究討議 打ち合わせ [本館4階46講義室]	12:00 ~ 13:30	昼食・休憩 次世代育成企画委員会 ランチタイムセッション (12:15 ~ 13:15) [本館1階 インターナショナルカフェ]
14:30 ~ 15:30	総会 [本館5階51講義室 キャノピーホール] 奨励賞授与式	13:30 ~ 16:15	課題研究 打ち合わせ [本館4階46講義室] 課題研究 [本館5階51講義室 キャノピーホール]
15:30 ~ 18:30	研究討議 [本館5階51講義室 キャノピーホール]	16:30 ~ 18:30	ラウンドテーブル [本館3階31・32・33講義室、 本館4階41・44講義室、 本館5階51講義室]
18:45 ~ 20:30	懇親会 [ポプラ通り 福利会館 2階レストラン「クルール」]		

参加要領

※ 非会員の方もご参加いただけます。

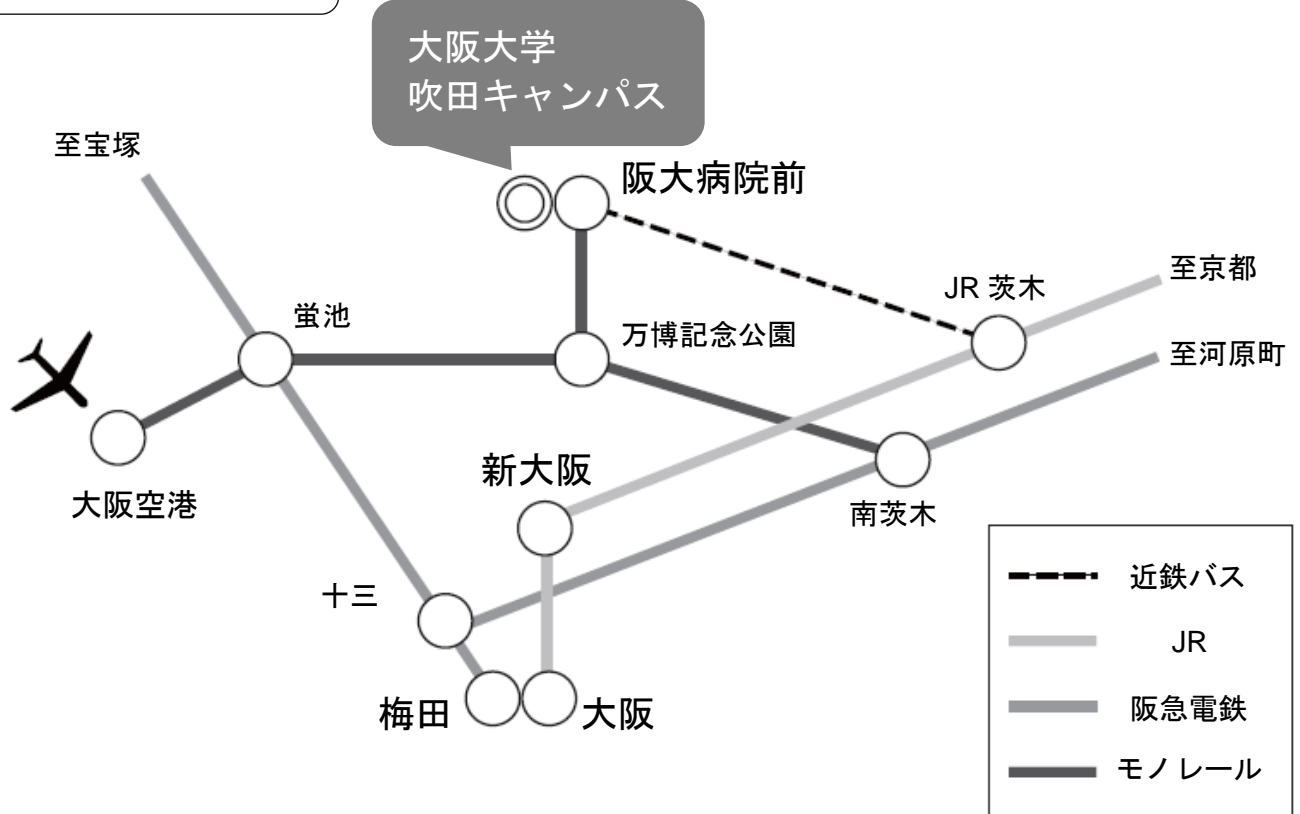
受付	本館1階 インターナショナルカフェ
大会参加費	(会員・非会員同額) 3000円(学生2000円)、懇親会費 4000円(学生2500円)
一般研究発表	発表20分/質疑応答5分 ※万一発表を取りやめる場合、発表者は速やかに大会準備委員会にご連絡ください。 なお、欠席の場合、発表の繰り上げは行いません。 大会アドレス: kyoutetsu2017@gmail.com

おしらせ

- ・飲食について、食堂やコンビニは開いておりませんので、お弁当をご持参ください。
なお、飲食の際は、リフレッシュルーム(本館2階、3階)をご利用ください。
インターナショナルカフェ(本館1階)、リフレッシュルーム(本館3階)には、自動販売機があります。
- ・会員控室は、リフレッシュルーム(本館2階、3階)にあります。
- ・授乳室は、「休養室」(本館1階)です。
- ・学内へのお車での入構はできません。公共交通機関でおいでください。
- ・特別なサポート・支援が必要な方は、大会アドレス(kyoutetsu2017@gmail.com)までご連絡ください。

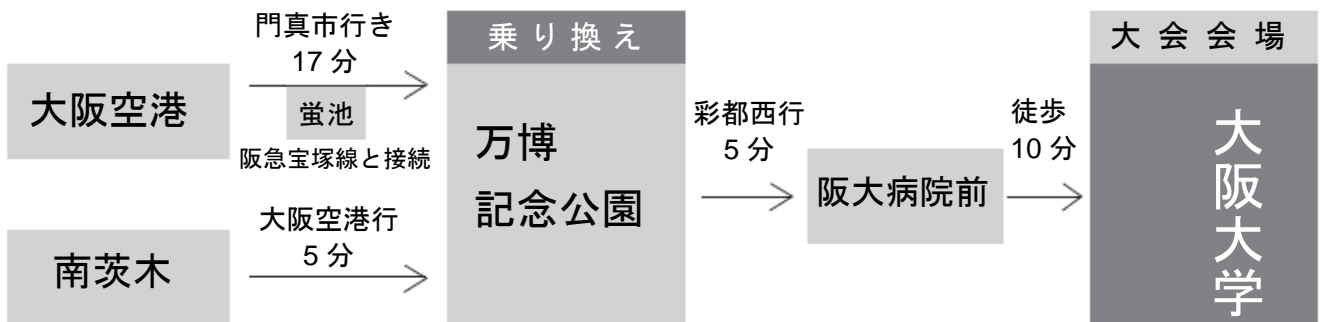
アクセスマップ

広域アクセス

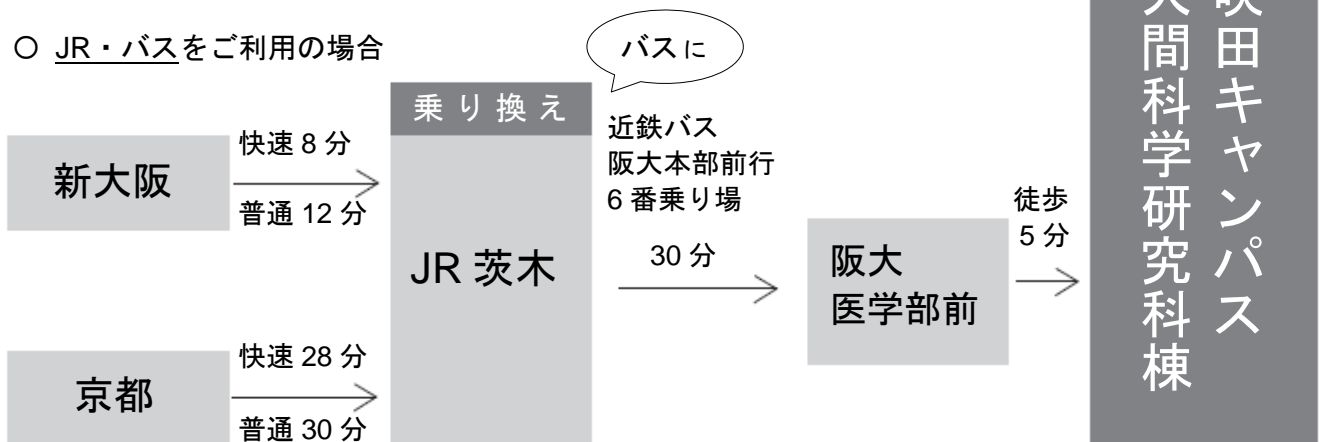


大会会場へのアクセス

○ モノレールをご利用の場合

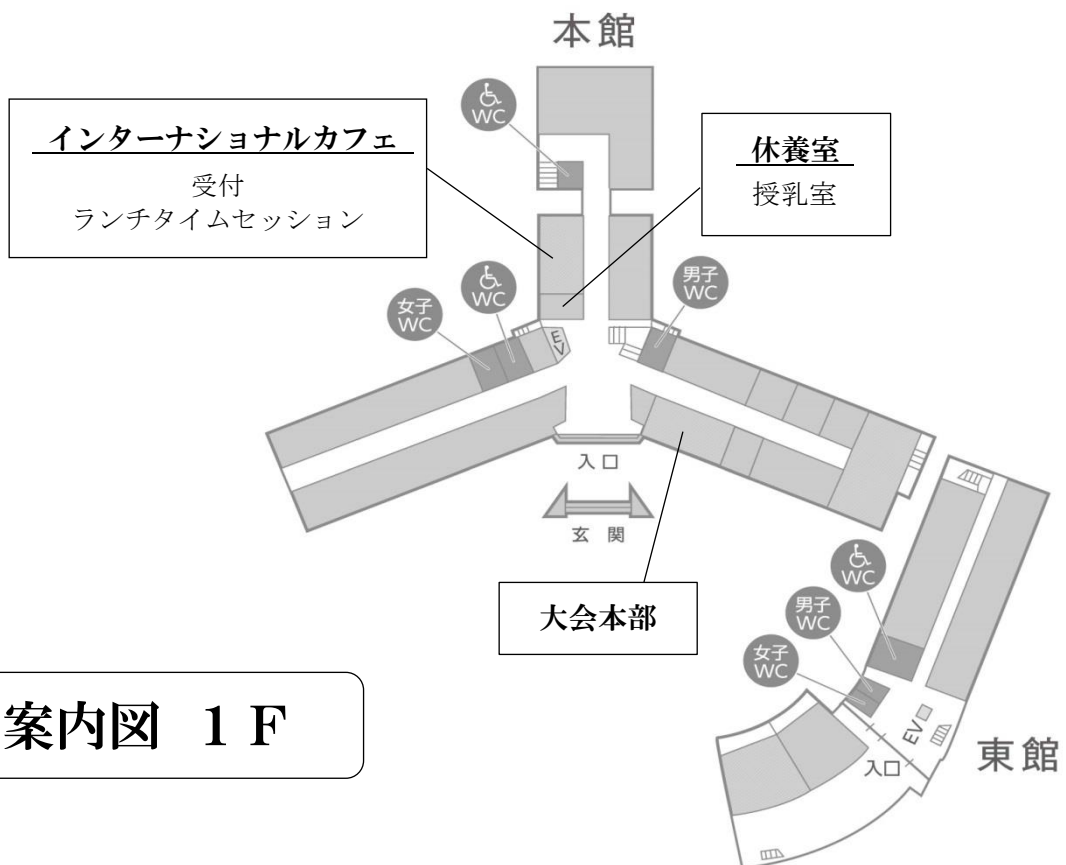
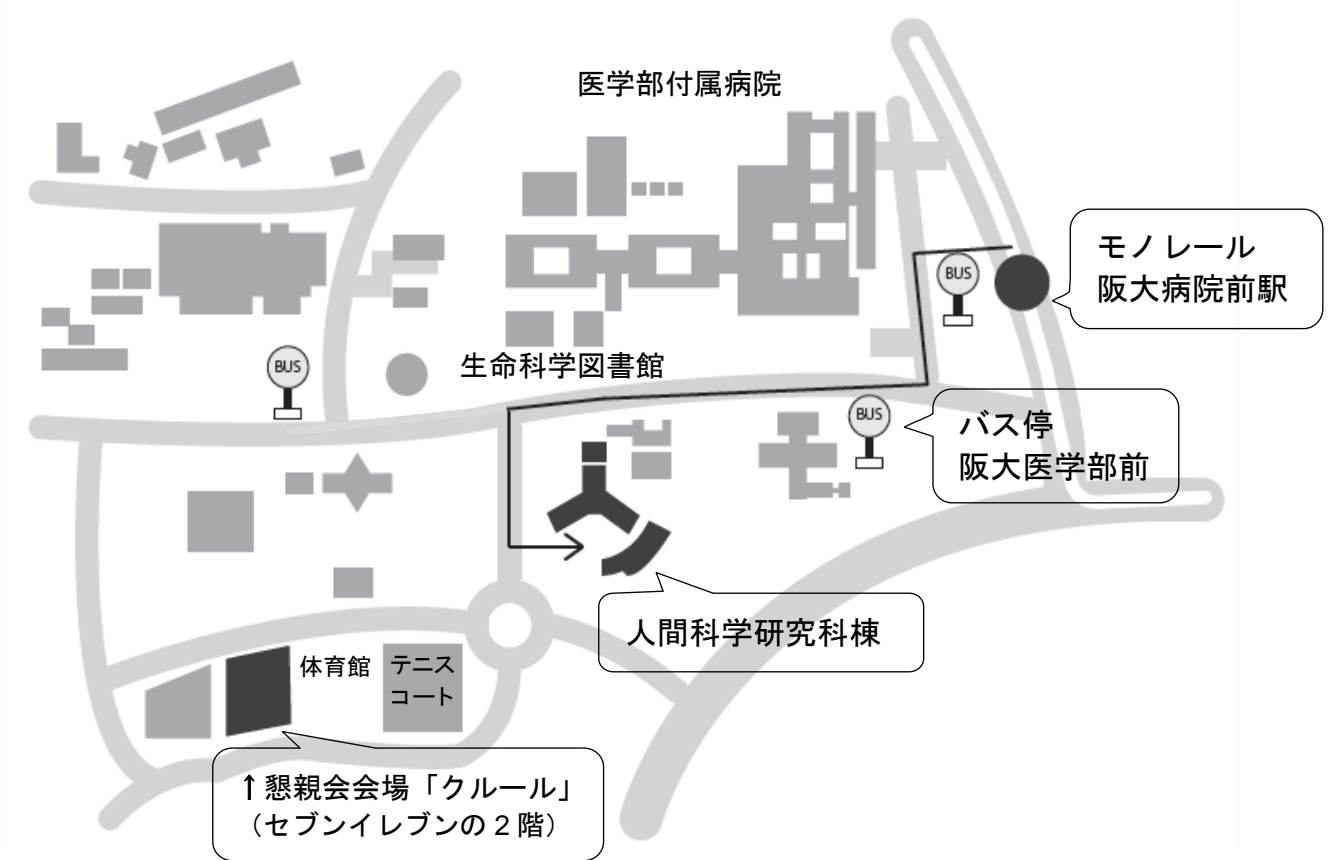


○ JR・バスをご利用の場合



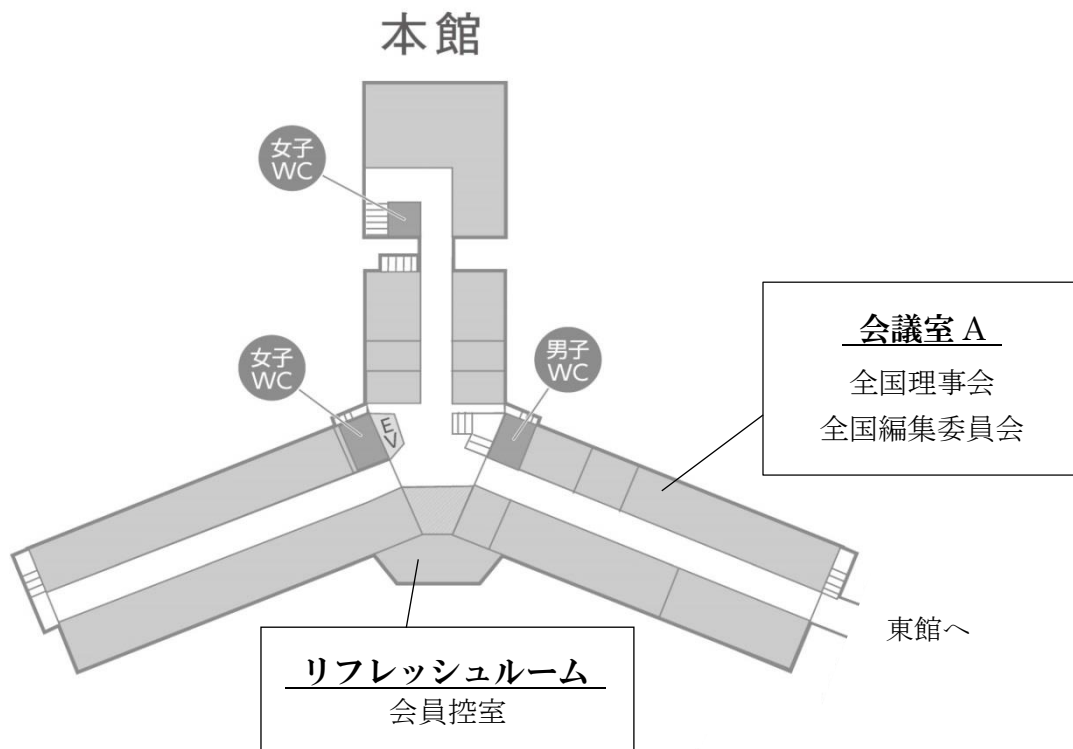
大会会場

大阪大学 吹田キャンパス 人間科学研究科棟

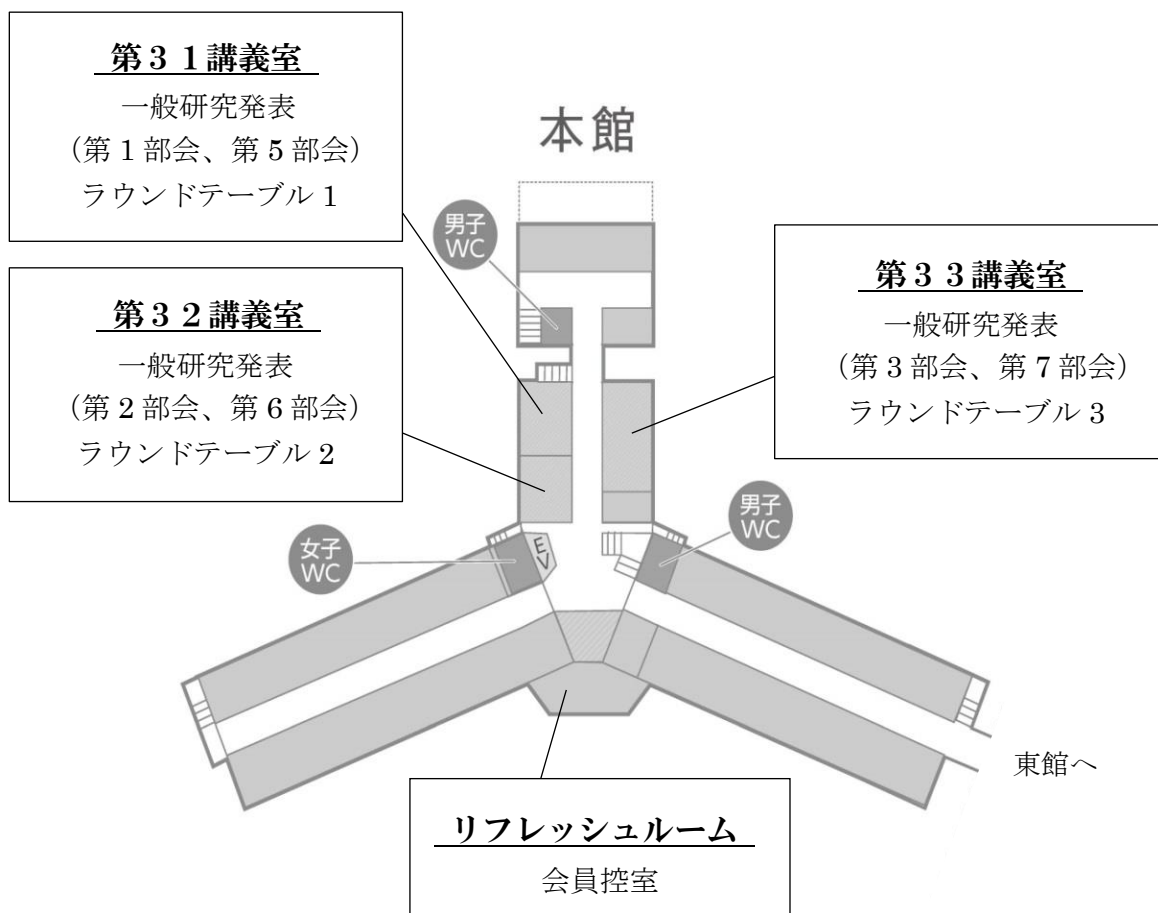


館内案内図 1F

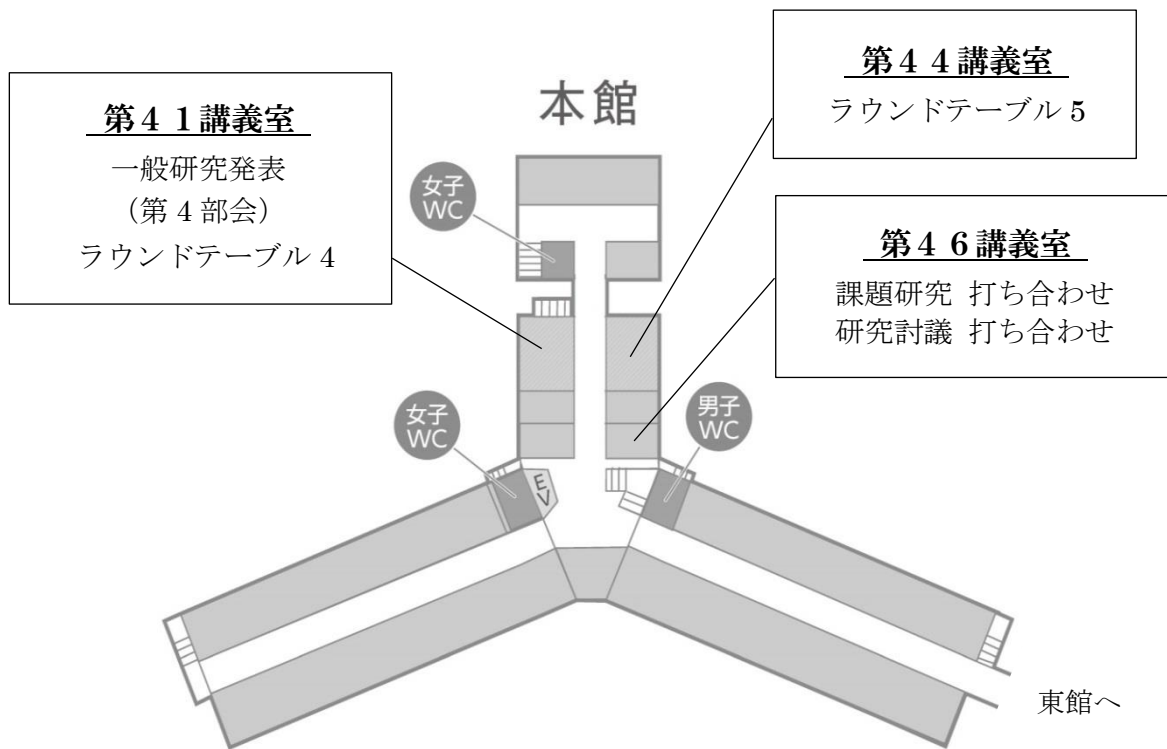
館内案内図 2F



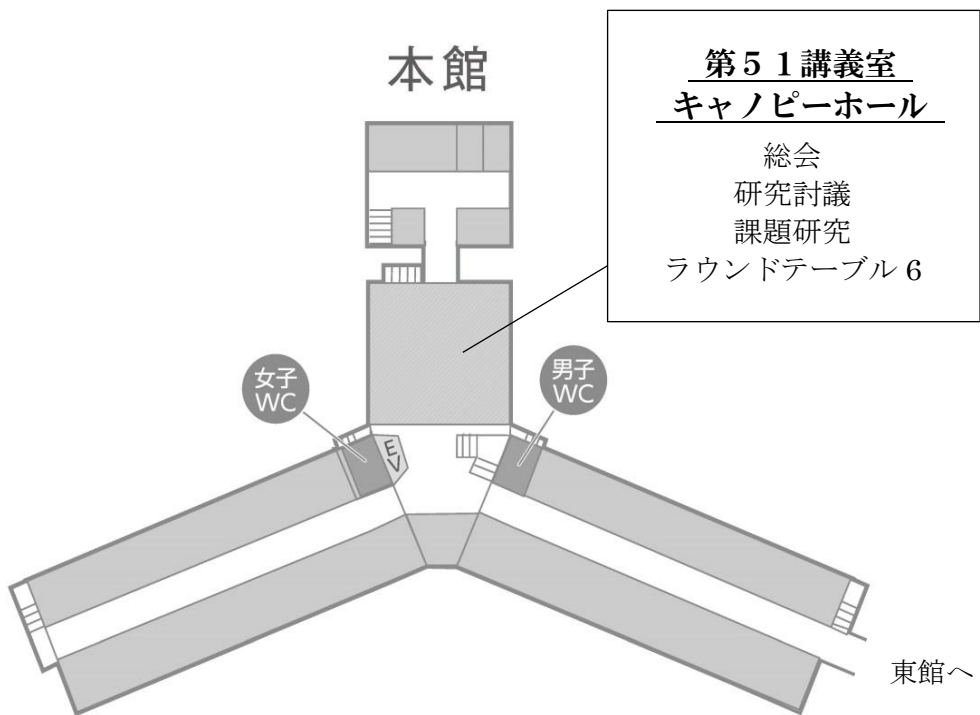
3F



4 F



5 F



第1部会 教育と超越

[本館3階 第31講義室]

司会者：鈴木宏（山口大学）、衛藤吉則（広島大学）

- 10：30 シュタイナーの「直観的思考」——思考を通して超越的世界へ至る道
奥本陽子（大阪府立大学大学院・院生）
- 10：55 ヤスパースの限界状況論に関する一考察 ——「負い目」概念に着目して——
嵩倉美帆（京都大学大学院・院生）
- 11：20 ベルクソンとレヴィナスにおける社会性の二つの次元
藤井奈津子（梅花女子大学）
- 11：45 フリードリヒ・シラーにおける「詩的真実」と美的人間形成
鈴木優（慶應義塾大学大学院・院生）
- 12：10 全体討議（～13：00）

第2部会 学校教育と哲学

[本館3階 第32講義室]

司会者：尾崎博美（東洋英和女学院大学）、伊藤博美（椙山女学園大学）

- 10：30 ネル・ノディングズの学校教育におけるケア論に関する一考察
——マルティン・ブーバーを手掛かりに——
星川佳加（神戸大学大学院・院生）
- 10：55 暗黙の知をあえて語ることの意義 ——身体技法の伝承場面を手がかりに——
堀雄紀（京都大学大学院・院生）
- 11：20 教師教育者が持つ状況を読み取る知についての予備的考察 ——D.ショーンの
「行為における知（knowing-in-action）」と感覚との関係を手がかりに
岡村美由規（広島大学大学院・院生）
- 11：45 倫理 - 政治的プラクシスとしての教育学における共約不可能性問題
深見奨平（広島大学大学院・院生）
- 12：10 哲学対話授業における生徒の変容
——個人内・個人間のコンフリクトに着目して——
内田桃子（大阪大学大学院・院生）
- 12：35 全体討議（～13：00）

第3部会 デューイと教育哲学

[本館3階 第33講義室]

司会者：藤井千春（早稲田大学）、古屋恵太（東京学芸大学）

- 10：30 「周縁的」亡命知識人 E. フロムの人間形成論
— J. デューイの思想との関わりに注目して
森田一尚（京都大学大学院・院生）
- 10：55 J. デューイ自然主義思想の教育的含意 — 意味と質の関係に着目して —
井上環（東京大学大学院・院生）
- 11：20 ジョン・デューイの生命哲学についての一考察
— ベルクソン批判から導かれる知性の創造性
西本健吾（東京大学大学院・院生）
- 11：45 J・デューイにおける「自己—実現」から「経験の再構築」への焦点の移行
— 初期教育思想成立期における形而上学批判の具体相 —
松橋俊輔（東京大学大学院・院生）
- 12：10 デューイにおける経験の共同性
木下慎（東京大学・特任研究員）
- 12：35 全体討議（～13：00）

第4部会 日本の教育哲学

[本館4階 第41講義室]

司会者：櫻井歓（日本大学）、川村覚昭（佛教大学）

- 10：30 「表現的生命」の福祉的課題性
— 木村素衛教育学における「解脱」「悟道」の探究
門前斐紀（京都国立博物館学芸部）
- 10：55 勝田守一における時間と他者をめぐる問題
桑嶋晋平（東京大学大学院・院生）
- 11：20 戦後期における城戸幡太郎の「ヒューマニズム」について
田岡昌大（大阪青山大学）
- 11：45 全体討議（～13：00）

13 : 00 ~ 14 : 30

昼食・休憩

全国編集委員会 [本館 2 階 会議室 A] (13 : 15 ~ 14 : 15)

研究討議 打ち合わせ [本館 4 階 第 46 講義室]

14 : 30 ~ 15 : 30

総会 [本館 5 階 第 51 講義室 キャンピアーホール]

15 : 30 ~ 18 : 30

研究討議 (開催校企画)

[本館 5 階 第 51 講義室 キャンピアーホール]

人間をめぐる問いのゆくえ

— 霊長類学、人類学、教育哲学の接点を探る —

報告者 : 山極壽一 (京都大学)、春日直樹 (一橋大学)、矢野智司 (京都大学)

司会者 : 田中智志 (東京大学)、藤川信夫 (大阪大学)

18 : 45 ~ 20 : 30

懇親会 [ポプラ通り 福利会館 2 階 レストラン「クルール」]

第5部会 ドイツの教育哲学

[本館3階 第31講義室]

司会者：岡本哲雄（関西学院大学）、白銀夏樹（関西学院大学）

- 09：30 O. F. Bollnow の思想にみる「言語の外」をめぐる知の特徴
井谷信彦（武庫川女子大学）
- 09：55 S.フロイトの Nacherziehung 概念 — 事後的な教育の営みとしての精神分析
後藤悠帆（京都大学大学院・院生）
- 10：20 W.v.フンボルトにおける対話概念
石本沙織（京都大学大学院・院生）
- 10：45 初期ベンヤミンにおける批評・翻訳・人間形成
— 理想化された人間像への抵抗 —
浅井健介（京都大学大学院・院生）
- 11：10 G.ブックにおける「同一性」概念 — 古典的人間形成論との連続性と断絶
森祐亮（慶應義塾大学大学院・院生）
- 11：35 全体討議（～12：00）

第6部会 フランスの教育哲学

[本館3階 第32講義室]

司会者：藤田雄飛（九州大学）、平石晃樹（金沢大学）

- 09：30 教育の概念と概念の教育 — ドゥルーズの方法と教育哲学の固有性について
稲田祐貴
- 09：55 物と表現 — 折り込まれた要素への視線
大森史博（青森公立大学）
- 10：20 「かくこと」をとおして世界に生きることの教育的意味
— リクール解釈学における「痕跡」概念の考察 —
朝岡翔（大阪体育大学・非常勤講師）
- 10：45 一般教育学の構想とその可能性 — G.バタイユにおける連続性の概念 —
森亘（京都大学大学院・院生）
- 11：10 後期フーコーの倫理的主体形成論における「教育的関係」
— 1982年以降の講義録をもとに
堤優貴（日本大学大学院・院生）
- 11：35 全体討議（～12：00）

第7部会 アメリカ・イギリスの教育哲学

[本館3階 第33講義室]

司会者：佐藤隆之（早稲田大学）、上地完治（琉球大学）

- 09：30 アイリス・ヤング責任論における「他者」の射程
大中のぞみ（広島大学大学院・院生）
- 09：55 状況的学習論における状況とは何か
：ウイトゲンシュタイン規則遵守論を手がかりに
平田仁胤（岡山大学）
- 10：20 ハンナ・アレントにおける近代教育批判の射程
田中智輝（東京大学・特任研究員）
- 10：45 現代アメリカ高等教育における civic engagement
——サーヴィス・ラーニングの文脈において——
間篠剛留（大阪成蹊大学）
- 11：10 アイデンティティの複合的発達におけるの超越性の考察
戸來知子（高野山大学）
- 11：35 全体討議（～12：00）

12：00 ～ 13：30 昼食・休憩

課題研究打ち合わせ [本館4階 第46講義室]

次世代育成企画委員会 ランチタイムセッション

[本館1階 インターナショナルカフェ] (12：15 ～ 13：15)

『教育哲学研究』に投稿する前に

——査読制度を通して「教育哲学研究とは何か」を考える——

報告者：下司晶（日本大学）、井谷信彦（武庫川女子大学）、平田仁胤（岡山大学）

司会者：小野文生（同志社大学）、生澤繁樹（名古屋大学）

コメント：松浦良充（慶應義塾大学）

13 : 30 ~ 16 : 15

課題研究（学会理事会企画）

〔本館 5 階 第 51 講義室 キャンピールホール〕

東アジアに於いて「人間」であること

提題者：石中英（北京師範大学、中国）、郭徳珠（ソウル国立大学、韓国）

洪如玉（国立嘉義大学、台湾）

司会者：加藤守通（上智大学）、丸山恭司（広島大学）

指定討論者：西平直（京都大学）

16 : 30 ~ 18 : 30

ラウンドテーブル

（ 1 ） 教育哲学は〈災害と厄災の記憶〉にいかに向き合うのか

— 『災害と厄災の記憶を伝える』が提起しえたこと／しえなかったこと

〔本館 3 階 第 31 講義室〕

企画者：小野文生（同志社大学）、山名淳（京都大学）

（ 2 ） ケースメソッドと教育哲学

〔本館 3 階 第 32 講義室〕

企画者：丸橋静香（島根大学）

（ 3 ） 道徳授業は道徳的でありうるか？— 教材「手品師」から考える—

〔本館 3 階 第 33 講義室〕

企画者：山岸賢一郎（長崎大学）

（ 4 ） 変容としての人間形成 — 理論と経験の間

〔本館 4 階 第 41 講義室〕

企画者：野平慎二（愛知教育大学）、藤井佳世（横浜国立大学）

（ 5 ） 「子どもの哲学」は教育的思考をいかに刷新するか

〔本館 4 階 第 44 講義室〕

企画者：小玉重夫（東京大学）

（ 6 ） 場面の知能を再考する

〔本館 5 階 第 51 講義室 キャンピールホール〕

企画者：渋谷亮（成安造形大学）、國崎大恩（神戸常盤大学）

10月14日（土） 15：30～18：30
本館5階 第51講義室 キャノピーホール

人間をめぐる問いのゆくえ
—— 霊長類学、人類学、教育哲学の接点を探る ——

報告者

山極壽一（京都大学）

春日直樹（一橋大学）

矢野智司（京都大学）

司会者

田中智志（東京大学）

藤川信夫（大阪大学）

人間とは何か。

これは、これまで教育学を含むさまざまな人間諸科学において繰り返し探究されてきたし、また、これからも探究され続けるであろう問いである。しかしながら、同じ人間を対象にするとしても学問領域ごとに研究方法・アプローチは異なり、それぞれの探究から導き出される人間像もまた多様なものとなる。

20世紀初頭、ドイツで展開された哲学的人間学は、細分化した人間諸科学から生み出された多様な人間像を前にして哲学的立場から示された最初の応答であった。そこでは、西洋哲学の伝統に鑑みつつ最新の科学的知見を取り入れながら、他の動物との差異に着目して人間の特質が定義された。これを一つの源流として、教育学の領域では、1950年代から70年代にかけて、人間諸科学の成果を成長・発達の観点から統合しようとするH. ロートや森昭の教育人間学が展開された。これは、いわば、人間科学として教育学を展開する試みであったと言える。さらに今日では、哲学的人間学からの系譜に加え、霊長類学や考古学、アナル派の歴史学、文化人類学における新たな人間学的知見を踏まえた学際研究（歴

史的・文化的人類学)も試みられている。

すでに京都学派の哲学・人間学やその影響を受けた教育学においても、研究対象の多様性と人間をまなざす研究者の観点の相対性は意識されていたが、ほぼ同時期に誕生した霊長類学や人類学においても、そうした意識が明瞭であるように思われる。今西錦司・伊谷純一郎の流れをくみ、人間が動物の生態圏に赴いて観察を行う日本の霊長類学においては、研究対象は食物、他の動植物、他の群、気候などの自然環境との間に結ばれた関係の網の目のなかに位置づけられるが、研究者を含む人間の社会もまたその関係の網の目の一部を構成している。人類学においても、いわゆる「存在論的転換」以降、対象だけでなく研究者もまた多様なモノや人が織りなす存在の網の目の一部を構成するものと見なされている。研究対象を実体としてではなく関係内存在として捉える点、さらに研究対象と関わる研究者もまたたえず揺れ動く網の目に組み込まれていると考える点は、両学問分野にも共通しているのではないだろうか。

この研究討議では、霊長類学から山極壽一先生、人類学から春日直樹先生をお招きし、教育学からは矢野智司会員にご登壇いただき、それぞれの学問分野の歴史的発展の概略を提示していただいた上で、今日にいたるまで人間を問う観点がどのように変化してきたのかを語っていただく。全体の討議では、異なる分野の新鮮な空気を深呼吸した上で、人間をめぐる問いのゆくえをともに展望したい。

【第2日目】次世代育成企画委員会 ランチタイムセッション

10月15日（日）12:15～13:15
本館1階 インターナショナルカフェ

『教育哲学研究』に投稿する前に —査読制度を通して「教育哲学研究とは何か」を考える—

企画

教育哲学会 次世代育成企画委員会

（下司晶、小野文生、生澤繁樹）

司会者

小野文生（同志社大学）

生澤繁樹（名古屋大学）

報告者

下司晶（日本大学）

井谷信彦（武庫川女子大学）

平田仁胤（岡山大学）

コメント

松浦良充（慶應義塾大学）

「次世代育成企画委員会」による企画です。比較的研究歴の浅い会員の積極的な参加を期待します。

若手研究者にとって『教育哲学研究』への掲載は登竜門的な意味を持ちますが、査読のプロセスや評価の観点は公開されていないため、どのような点に気をつけて論文を執筆すればよいのか、不安を覚える会員も少なくないかと思えます。学会誌という性格上、査読過程をすべて公開することは難しいですが、これから投稿を考える会員にとって少しでも有益になるよう、教育哲学の論文には何が求められるのかをともに考える場を設定しました。

セッションでは、編集委員の一人が個人的な立場から査読の際に留意している点を、投稿論文掲載経験者が論文の執筆や修正の際に気をつけたことなどを、経験を踏まえて語ります。その上で、学術論文という形式や査読という制度が有する意義について、一緒に考えていきたいと思えます。

参加者は下記論文を事前にお読み頂くと、いっそう理解が深まるでしょう。

- ① 井谷信彦「教育との連関における気分の哲学的「発見」——M・ハイデガー『存在と時間』以前のパトス解釈」『教育哲学研究』第91号（2005年）、47-65頁。

(https://www.jstage.jst.go.jp/article/kyouikutetsugaku1959/2005/91/2005_91_47/_pdf)

- ② 平田仁胤「ウイトゲンシュタイン規則論の学習論的意義 —— 「ウイトゲンシュタインのパラドックス」の検討を通じて」『教育哲学研究』第95号（2007年）、71-88頁。

(https://www.jstage.jst.go.jp/article/kyouikutetsugaku1959/2007/95/2007_95_71/_pdf)

本企画はランチタイムセッションとして行われます。昼食をとりながらお気軽にご参加下さい。会場での昼食の販売はございませんので、事前にご準備下さい。

【第2日目】 課題研究

10月15日（日） 13:30～16:15
本館5階 第51講義室 キャノピーホール

東アジアに於いて「人間」であること

司会者

加藤守通（上智大学）

丸山恭司（広島大学）

提題者

石中英（北京師範大学、中国）

郭徳珠（ソウル国立大学、韓国）

洪如玉（国立嘉義大学、台湾）

指定討論者

西平直（京都大学）

現在、人間であることの意味が様々な角度から脅かされている。ポストモダニズムは理性への信頼を侵食した。自然科学は、人間を動物から分け隔てた分厚い壁を取り払った。そして今や、人工知能の急速な進歩は、単なる機械的な計算のみならず、理性のより広い分野で、人類を凌駕しようとしている。

このことは、教育に対する大きな挑戦である。教育が依拠してきた人間の伝統的な概念は、ロゴス（アリストテレス）や合理性（デカルト）によって規定されてきたからである。しかし、この挑戦はまた、人間であることの意味を深く考え直すチャンスを提供している。この再考の過程において、仏教や儒教や道教など膨大な資源を持つ東アジアの伝統は、特別な役割を演じることができるかもしれない。もちろん、このことは、東西の相違を強調し、東の優位を説くことではない。このような相違自体、今や批判にさらされている近代の所産だからである。西洋の科学と文化の精力的な受容も、東アジアが誇るべき伝統であることを忘れてはならない。したがって、より柔軟で差異化されたアプローチが必要であ

ろう。

課題研究では、中国・韓国・台湾の提題者と共に、この問題について考えたい。なお各提題は、それぞれの国の教育哲学会の活動の紹介も含んでいる。

使用言語は英語であるが、テキストは日本語訳と共にあらかじめ配布する。また、フォーからの質問は日本語でも可能である。

【第2日目】 ラウンドテーブル

10月15日（日） 16：30～18：30

ラウンドテーブル1

〔本館3階 第31講義室〕

教育哲学は〈災害と厄災の記憶〉にいかに向き合うのか —『災害と厄災の記憶を伝える』が提起しえたこと／しえなかったこと

企画者：小野文生（同志社大学）、山名淳（京都大学）

司会者：小野文生（同志社大学）、岡部美香（大阪大学）

提案者：山名淳（京都大学）、矢野智司（京都大学）

岡部美香（大阪大学）、小野文生（同志社大学）

池田華子（天理大学）

コメンテーター：生澤繁樹（名古屋大学）、平田仁胤（岡山大学）

本ラウンドテーブルでは、『災害と厄災の記憶を伝える—教育学は何ができるのか』（勁草書房、2017年）の著者が本書および各章の執筆に当たって考えたことや感じたことを報告する（10分×5名）。それを受けて2名の指定討論者がその内容についてコメントを試みる（20分×2名）。その後、フロアも交えた議論に向かう。本ラウンドテーブルの中心に置かれるのは、本書が達成したことと達成しえなかったことを批判的に検討するという課題である。議論を通して、教育哲学が〈災害と厄災の記憶〉というテーマに向き合うことの可能性と限界について考察することの手がかりを得たい。

ラウンドテーブル2

〔本館3階 第32講義室〕

ケースメソッドと教育哲学

企画者：丸橋静香（島根大学）

提案者：丸橋静香（島根大学）、竹内伸一（徳島文理大学）

田中智輝（東京大学大学総合教育研究センター）

村松灯（東京大学大学総合教育研究センター）

山辺恵理子（都留文科大学）

町支大祐（東京大学大学総合教育研究センター）

渡邊優子（東京大学大学総合教育研究センター）

指定討論者：丸山恭司（広島大学）

ケースメソッドは教育哲学にとってどのような意味があるのだろうか。企画者は、昨年度より教職大学院において、ケースメソッドを用いた授業を同僚とともに進めている。その教育哲学的意義として、当初は先行研究・実践に学ぶなかで、〈他者〉の存在、それへの倫理的応答の重要性についての気づきを受講者にもたらしうることを想定していた。これに加え、自身の実践を経るなかで、その他にも教育哲学（教育）上有意義な点があるように思えてきた。例えば、暗黙知の可視化・省察、重要な諸概念の獲得・専有、「教育現場」についての知見の獲得、あるいは〈あいだ〉の事象である教育事象を表出・体感しうるメディアとして。そこで本ラウンドテーブルでは、ケースメソッドのもつ教育哲学にとっての意義について、すでにケースメソッドを行っている者によって、できるだけ自身の実践を紹介しながら議論をしたい。

道徳授業は道徳的でありうるか？ —教材「手品師」から考える—

企画者・司会者：山岸賢一郎（長崎大学）

提案者：山岸賢一郎（長崎大学）、鈴木篤（大分大学）

山口裕毅（環太平洋大学）

指定討論者：松下良平（武庫川女子大学）

「手品師」（江橋照雄作、初出は1976年）は、小学校教師にとって、いわゆる「定番」の道徳授業教材である。のみならずこの教材は、教育哲学者にもよく知られている。宇佐美寛氏、松下良平氏らをはじめとする少なからぬ教育哲学者が、鋭くも容赦のない批判を向けてきたからだ。

いま、道徳教育は大きな変化の最中にある。平成30・31年度からは、小中学校で「特別の教科 道徳」が完全実施となる。そんないまこそ改めて、「手品師」という教材と「手品師」を活用した道徳授業とを、教育哲学者として考え、議論してみたい。教育哲学者として議論するなかで、道徳科の授業を道徳的なものにしていくための、道徳教育として意味のあるものにしていくための、示唆を得たい。

そのために提案者らは、「手品師」およびこの教材を活用した授業を紹介し、それらを教育哲学的に批判し、またあるべき授業に関する提案を行う。活発な議論を期待したい。

変容としての人間形成—理論と経験の間

企画者：野平慎二（愛知教育大学）、藤井佳世（横浜国立大学）

司会者：鳥光美緒子（中央大学）

提案者：ハンス＝クリストフ・カラー（ハンブルク大学）

野平慎二（愛知教育大学）

指定討論者：眞壁宏幹（慶應義塾大学）

現代のドイツ教育哲学では、伝統的な人間形成（Bildung）の概念を経験的な現実と関係づけながら論じようとする試みがひとつの潮流をなしている。経験的な素材であるビオグラフィ・インタビューを人間形成論の立場から解読する試み（bildungstheoretisch orientierte Biographieforschung; BOB）はその典型である。もっとも、BOBにはさまざまな理論的な課題が指摘されてもいる。BOBは経験的現実から何らかの理論を導き出しうるのか（理論と経験との関係）。BOBは「望ましい人間形成」について語りうるのか（人間形成に関わる規範の問題）。BOBは、人生の出来事の語りから人間形成をいかに再構成するのか（インタビュー分析の方法論）、等々。このラウンドテーブルでは、「変容としての人間形成過程の理論」を提唱するハンス＝クリストフ・カラー教授（ハンブルク大学）による報告を軸に、インタビュー分析の具体例を踏まえながら、人間形成論と経験的研究との架橋のあり方について考えてい。

「子どもの哲学」は教育的思考をいかに刷新するか

企画者・司会者：小玉重夫（東京大学）

提案者：森田伸子（日本女子大学・名誉教授）

岡田泰孝（お茶の水女子大学附属小学校・教諭）

久下谷明（お茶の水女子大学附属小学校・教諭）

石川直実（東洋大学京北中学高等学校・教諭）

神戸和佳子（東京大学大学院・院生、

東洋大学京北中学高等学校・非常勤講師）

指定討論者：室井麗子（岩手大学）

本ラウンドテーブルは、「子どもの哲学」に関する理論と実践の現状を報告し合い、そこから、教育的思考刷新への道を模索する試みである。昨年の大会では、「いま、なぜ「子どもの哲学」か——哲学的思考の刷新へ向けて」と題するラウンドテーブルを開催し、子どもという存在によって哲学的思考が刷新される時、子どもという存在にはいかなる変容がもたらされるのかという問いを共有することができた。その成果をふまえて、本年は、教育的思考の刷新というもう一つの問いを立てて本ラウンドテーブルを企画する。

森田会員が、お茶大附小での実践に関わった経験もふまえつつ、子どもの哲学についての理論的問題提起を行う。また、哲学教育に関する先進的取り組みを行っているお茶大附小と、東洋大学京北中学高等学校の実践を検討する。さらに、それらに対して、教育哲学の視点から指定討論を行う。

以上をもとにして、来るべき市民としての子どもを過去と未来の間に探りあてていくことをめざしていきたい。

場面の知能を再考する

企画者：渋谷亮（成安造形大学）、國崎大恩（神戸常盤大学）

司会者：藤田雄飛（九州大学）

提案者：渋谷亮（成安造形大学）、國崎大恩（神戸常盤大学）

得能想平（大阪大学大学院・院生）、平野拓朗（鹿児島大学）

20世紀の前半、行動主義の試行錯誤の理論やドイツのゲシュタルト理論が、行為に内在する知能の研究を推し進めていくなか、フランスの心理学者アンリ・ワロンは、「場面の知能」という発想を展開した。これによって彼は、主体と環境の相互作用の中で場面それ自体が力動的に組織されるあり様を問題化し、同時に、場面の組織化が表象や言語に基づく「推論的知能」といかに関係するのかを考察していった。こうしたワロンの試みは、知能や学習の捉え直しがなされつつある現在、改めて再考されるべきもののように思われる。本ラウンドテーブルでは、「場面の知能」という発想を、フランス現代思想、心理学・精神分析、プラグマティズムといった多様な連関の中で考察し、その潜在的な広がりをも提示することを旨とする。



教育哲学会 第60回大会

教育哲学会 第60回大会 準備委員会事務局

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-2
大阪大学大学院 人間科学研究科

岡部美香研究室 気付

Email : kyoutetsu2017@gmail.com